

古典の中の人と体 (1)

——詩篇の中から——

平沢 彌一郎・臼井 永男

Man and Body Described in the Clasic (1)

— Man and body described in the Psalms —

Yaichiro HIRASAWA and Nagao USUI

ABSTRACT

“ Tears may linger at nightfall,
but joy comes in the morning. ”

(PSALM 30 : 5 NEB 1970)

—ナンリ	ルケーボツラエウ	—キベ	シーリーヤ	ブレゲーバ
: הָנָה	לְבָרַח	בְּכִי	יָלִין	בְּעֵרָב
(喜びは)	(しかし朝に)	(悲しみは)	(とどまる)	(夕に)

Note : A Hebrew sentence is read from right. So read kanaletters written at the side form right.

Not a day begins without my reading the book of psalms. It renews me and brings joy to me, becoming a song of praise to God—“ a prayer. ” It is said that Luther ran away with psalms, and Calvin crooned Psalm 6 in his deathbed.

150 Psalms are collected in the original Hebrew Old Testament. The book of Psalms is titled תְּהִלִּים (t^ehillīm). This word, meaning “songs of praise,” is a noun derived from a stem הָלַח that appears as a verb in הַלְלֵי־יָהּ (hall^elu yāh praise YAH). The book of Psalms might be entitled so when 150 Psalms were approved as a hymnbook of the Jewish Order. In an older era, a title “ a prayer ” תְּפִלָּה (t^ephillāh) is well found, and it is used for songs complaining of sorrow,

that are found many in the book of Psalms.

Songs of praise and songs of sorrow. These two kinds of songs can be said to be main in “Psalms”. So I paid my attention to a question how the authors of psalms praised God, that is, in what manner and in what way. To my surprise, extremely many words relating to “ the human body ” are used in their manner and ways.

So I picked up all the words relating to “ the human body ”, used in a Japanese versin of Psalms translated by the Japan Bible Society, and found that their number is 650 and they are classified into so much so 40 groups. 40 groups are as follows. Hand (131), eye (77), mouth (71), foot (48), face (42), ear (37), tongue (34), head (27), lip (26), blood (19), person (16), bone (16), flesh (15), horn (13), arm (12), tooth (7), breast (6), bosom (6), fetus (6), throat (4), waist (4), hair (3), eyelid (3), nose (3), jaw (3), knee (3), body (3), neck (2), finger (2), cheek (1), pupil (1), beard (1), shoulder (1), abdomen (1), internal organ (1), back (1), heel (1), fat (1), marrow (1), tusk (1). The numbers in parentheses show frequency in use of the words. The sainted poets might turn

their eyes right on God's face, stretch out their both hands, and praise God with their lips. Our hands, feet, ears and noses, and their shape, size and function are all made in order to praise God, and you can never be God's sons or daughters unless you use them only for this purpose.

詩篇は王冠をちりばめた宝石のように、その一つ一つが小さくて純、そして自由な光を放っている。旧約中最も愛読される。これは旧約と新約との橋渡しをし、ルーテルはこれを抱いて逃げさり、カルビンはその死床において第6篇を口ずさんだという。

詩篇が多くの人に親しまれるのは、詩であるがためである。理屈でなく、心の底から感じたまま流れ出たものである。だからまた人の心の奥深いところに入り込んでくる。詩経、古今集にもその例を見る。詩はまた飛躍する。たとえば旧約時代に人は復活を信じていなかったと言われるが、16:10には確かに復活を思わせる表現がなされている。また73:25, 26は、自分の地上生活はだんだんみじめになるばかりで、神を信じた功德はないが、それでも「神はわが巖なり！」と歌っている。

詩篇には、תְּהִלִּים (t^ehillim) という表題がついている。この語は「ハッレルー・ヤーハ」(ヤハをほめたたえよ)では動詞の形で出てくる הָלַל という語源から作られた名詞で、「讚美の歌」を意味する。詩篇全体にこの名称がつけられたのは、詩篇150篇がユダヤ教団の讚美歌集として認められた頃であったらう。より古い時代には「祈り」תְּפִלָּה (t^ephillah) という名称がよく見られるが、この名称はことに詩篇の中に多い歎きを訴える歌を指す場合に用いられる。

「讚美の歌」と「歎きの歌」、この二つが詩篇の中心であると言えよう。

著者らは、この二つの歌の中に「人の体」に関する用語がどのように歌われているかに着目し、その用語を日本聖書協会訳から全部拾い上げ、それらが旧約聖書の中で、どのような箇所、またどのような意味で用いられているかを調べ、かつその一つ一つのヘブライ原語、New English Bible, Luther それに関根正雄訳に当たって比較することを試みた。

さて拾い上げた用語は40種類におよび、その延べ回数は650回という膨大な数に上ることがわかった。次に示す用語は回数が多い順で()内はその使用回数である。

表 1. 詩篇の中の「からだ」に関する用語とその使用頻度

用語	数	用語	数	用語	数	用語	数
手	131	身	16	腰	4	ひとみ	1
目	77	骨	16	毛	3	ひげ	1
口	71	肉	15	まぶた	3	肩	1
足	48	角	13	鼻	3	腹	1
顔	42	腕	12	あご	3	内臓	1
耳	37	歯	7	膝	3	背	1
舌	34	胸	6	からだ	3	くびす	1
頭	27	ふところ	6	首	2	脂肪	1
唇	26	胎	6	指	2	髓	1
血	19	のど	4	ほお	1	きば	1

手 (131), 目 (77), 口 (71), 足 (48), 顔 (42), 耳 (37), 舌 (34), 頭 (27), 唇 (26), 血 (19), 身 (16), 骨 (16), 肉 (15), 角 (13), 腕 (12), 齒 (7), 胸 (6), ふところ (6), 胎 (6), のど (4), 腰 (4), 毛 (3), まぶた (3), 鼻 (3), あご (3), ひざ (3), からだ (3), 首 (2), 指 (2), ほお, ひとみ, ひげ, 肩, 腹, 内臓, 背, くびす, 脂肪, 髓, きば (夫々 1 回).

聖書は「手」の動作をもって種々の表象としている。手を上げることは神に対する祈り、また民への祝福であった。また「目」については、ヘブライ原語 עֵינַיִם (°ēnayim) は 854 回も使われており、この語の頻出度が高いことは人間生活において目がいかに重要な役割をもっていたかを示す。人類の墮落が「目」をとおしてはじまったものであり、そしてその目を神にむけなければならないという聖詩人の叫びは、詩篇において絶頂に達している。

また、聖書が言語の器官である「口」を、「言語」の意味において用いていることは、抽象概念を具体的なものを用いて表現するヘブル人の特徴を示す好例として興味がある。沈黙は口に手を当てること (ヨブ 40:4), 大胆に語る自由は「口を開く」(エペ 6:19) と表現された。

詩篇の中に「手」「目」「口」の頻度が高いのは、聖詩人たちは、両手を高くさしのべ、目を上に見はり、そしてのどが張り裂けんばかりに、神を讚美し、また歎きを赤裸々に訴えたのであろう。そしてその生き生きとしたかれらの祈る姿があまりと浮かんで来るようである。

以下、詩篇の中に使われている「からだ」に関する各用語の使用法とその意味等について述べる。

I. 頭 部

I.1. あたま, かしら, こうべ, רֹשׁ, רֶגֶל רִגְלֵי, כֹּשֶׁת, head, Haupt (27 回)

聖書の中に、「あたま」、「かしら」、「こうべ」、「首長」などと訳された רֹשׁ (rō's) は 599 回、同じく「あたま」、「かしら」と訳された κεφαλή は 76 回使用されており、意味は文脈によって多様である。ヘブル人は頭を知性の座とは考えず、生命の本源と考えた。そこから種々の表現が生まれた。だれかの「こうべ」に血があるという時には、死に対する責任があることの意味である (士師 2:19, II サム 1:16, ここで口語聖書は「~かしら」を省略)。「頭を上げる」は「成功を許される」の意味 (創世 4:13, 20, 詩篇 27:6, 「こうべは……あげられる」)。また「頭をあげる」は、自らを主張することを意味した (士師 8:28, 詩篇 83:2)。「火を彼のこうべに積む」(箴言 25:22, ロマ 12:20, 「彼の頭に……炭火を積む」) は悪に報いるに善をもってすることを表した。エペソ書およびコロサイ書では、教会はキリストを「かしら」にいただく「キリストのからだ」として描かれる (エペ 1:22, 5:23, コロ 2:19)。これは教会がその生命を全くキリストに負い、またキリストが教会の完全な支配権をもったことを意味している。

詩篇の中に「あたま」は 9 回使用されている。N.E.B. はすべて head, Luther によるものは Haupt と Kopf が引用されている。そのうち龍の頭と、レビヤタンの頭を除き、残

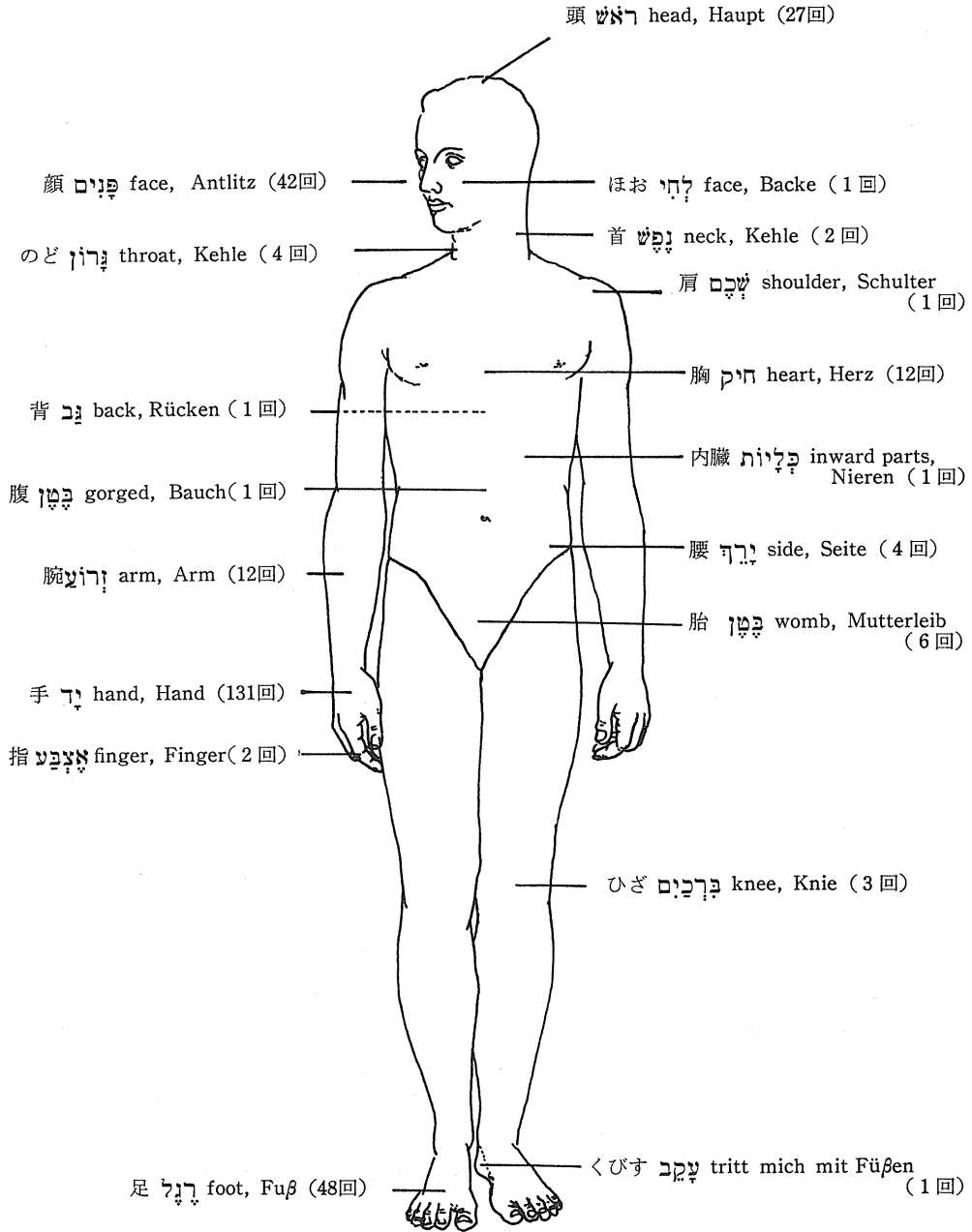


図 1. 詩篇の中「からだ」に関する用語とその部位 (I)

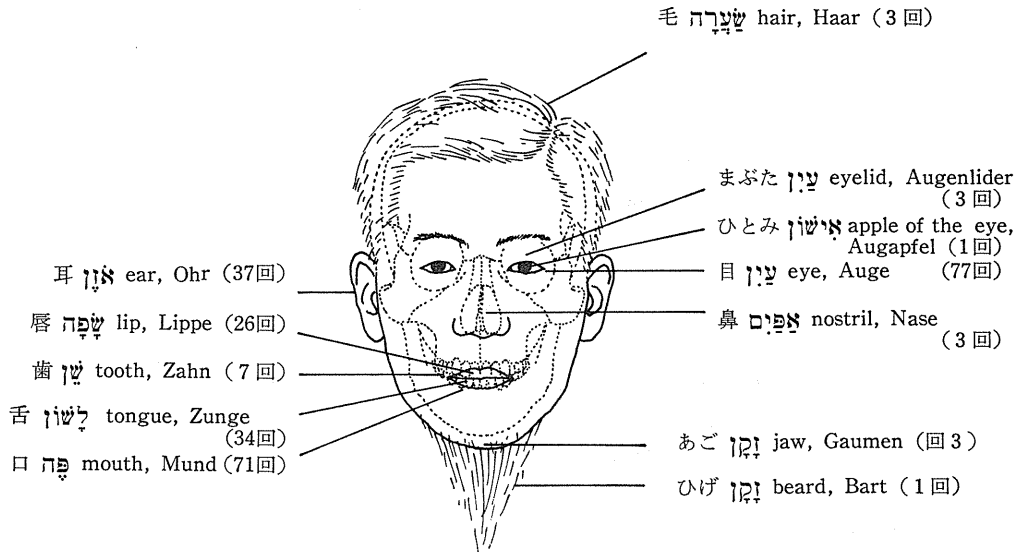


図 2. 詩篇の中「からだ」に関する用語とその部位 (II)

り 7 回はすべて人間の頭である。

「かしら」は 4 回, 「こうべ」は 13 回使用されている。24 : 7 および 24 : 9 は「門」に対して「こうべをあげよ」と使っているがその他は, すべての人間の頭として使っており, 神に対するものはない。

(あたま——3 : 3, 38 : 4, 40 : 12, 66 : 12, 68 : 21, 69 : 4, 74 : 13, 74 : 14, 83 : 2, 109 : 25)

(かしら——7 : 16, 18 : 43, 21 : 3, 22 : 7)

(こうべ——7 : 16, 23 : 5, 24 : 7, 24 : 9, 27 : 6, 35 : 13, 64 : 8, 68 : 21, 110 : 7, 133 : 2, 140 : 7, 140 : 9, 141 : 5)

I.2. け, しらが, שֵׁקֶרֶת, שֵׁקֶרֶת, hair, Haare (3 回)

「毛, け」は 2 回使用されており, いずれも, 「頭の毛」ほども数多くの, といった形容的な使い方がされている。

「しらが」は 1 回使用されているだけである。年老いて「しらが」となるとも, と時間の長さ, 信念の強さを表現するための形容的な使い方がされている。

(け——40 : 12, 69 : 4)

(しらが——71 : 18)

I.3. かお, みかお, ほこりがお, פָּנִים, face, Antlitz, Angesicht (42 回)

旧約で最も多く使われている語は, פָּנִים, (panim) pl. で「顔」, 「み顔」, 「顔色」などと訳され, また表面 (surface) の意味で「おもて」(「水のおもて」創世 1 : 2 他, 「地のおもて」創世 4 : 14 他), また person の意味で「人」(申命 1 : 17 他), presence の意味で「前」, 「み前」(「わたしの前」創世 7 : 1 他, 「主の前」レビ 1 : 3 他, 「主のみ前」詩篇 114 : 7 他, など) その他に訳出されている。新約では πρόσωπον が最も多く, この語も

「顔」のほか「うわべ」、「姿」、「人」、「前」などに約されている。

人の墮罪は神のみ顔を避けさせた(創世 3:8, 4:5)。神の顔を見る者は死ぬという畏懼の念はイスラエルびとを圧倒的に支配していた(出エ 33:20)。ヤコブはベニエルにおける「顔と顔をあわせて神を見る」体験に自ら驚いた(創世 32:30)。しかしモーセについては「主はモーセと顔を合わせて語られた」(出エ 33:11)と記され、彼の受けた啓示の直接性を示している。主は祝福するために「み顔を……向け」(民数 6:26)、罪ある者には罰するために「顔を向け」られる(エレ 21:10)。このゆえに「その僕たちは……御顔を仰ぎ見るのである」(黙示 22:3-4)との約束の意義は深遠なものがある。キリスト信者は「その時」すなわち神の国の完成には神と、「顔と顔を合わせて」相見る希望を持っている(Iコリ 13:12)。

顔はさまざまな感情が端的に表れる箇所であり、「顔を伏せる」は不快を、「顔をあげる」は喜びを表した(創世 4:6, 7)。「顔をおおう」のは悲しみのしるしであり(IIサム 19:4)、これはまた尊敬の念を表す姿勢でもあった(出エ 3:6, I王 19:13, イザ 6:2)。「顔につばきする」ことは、最大の侮辱を加えることを意味した(民数 12:14, 申命 25:9, マタ 26:67)。オリエントの人びとは「わたしはお前の顔につばきをかける」と言うが、実際には地面につばきを吐く習慣をもっている。貧者を虐待することを「貧しい者の顔をすり砕く」と表現して、その悲惨さを示している(イザ 3:15)。

詩篇の中に「顔、かお」は11回使用されている。N.E.B.ではfaceの他にhead(34:5, 83:16, いずれも恥づかしい表現で)が使われている。不快、喜び、悲しみ、侮辱などの感情の表現に使われているのがほとんどであるが「姿」、「人」を表している箇所が4回ある。また神の「顔」について2回使用している。

「御顔、みかお」のヘブル語は、「かお」と同じであるが、「みかお」と訳された場合は神について用いられており、それは神自身をさし、また神の臨在をさしている。「みかお」は29回使用されており、そのうち、神自身について11回、残り18回は神の臨在について用いられている。

「かお」にも2回神自身について使用されており、協会訳では「かお」と「みかお」を「人」と「神」とに明確に使い分けしていない。

「誇り顔、ほこりがお」として1回使用されている。אִס אִסּוּ, arrogant as he is, seinem Stolz, が引用されており、悪しき者に対してこの言葉が使用されている。鼻たかだかに自慢している様子を表している。

この他に「みかたち」מִימָוֶה וְנִמְוֶה וְנִמְוֶהと訳された箇所があるが、N.E.B.はvision, LutherはAntlitzを使っており、神自身の「姿」を意味している。

(かお——10:11, 21:12, 27:8, 34:5, 44:15, 69:7, 69:17, 83:16, 84:9, 104:15, 132:10)

(みかお——4:6, 11:7, 13:1, 17:15, 22:24, 24:6, 27:8, 27:9, 30:7, 31:16, 34:16, 39:13, 42:2, 44:3, 44:24, 51:9, 67:1, 80:3, 80:7, 80:16, 80:19, 88:14, 89:15, 90:8, 102:2, 104:29, 105:4, 119:135, 143:7)

(ほこりがお——10:4)

(みかたち——17:15)

I.4. ほお, פָּנִים, face, Backe (1回)

敵の「ほお」を打つ, という表現で1回だけ使われている。相手に侮辱を与える意味に用いられている。

(3:7)

I.5. まぶた, עֵפָּלַי, eyelids, Augenlider (3回)

常に双数形で表現され, ほとんど「眼」と同様に用いられている。泣く時に涙が出(エレ9:18), 眠る時には閉ざし(詩篇132:4, 箴言6:4, また, ヨブ16:16), まぶたを開いて正視する(箴言4:25)。ヤハウエが人の心をためされることについて(詩篇11:4), 反対にみだらな女のまなざしについて(箴言6:25) また怒ってつりあがる眼について(箴言3:13) 引用されている。また, 形容的にやみを破って陽光のさすあけぼのについて(ヨブ3:9, 41:18) 引用されている。

詩篇では3回使用されているが, いずれも自分の心の強い主張を表現している。なお3回の中, 1回は, ヘブル語 עֵפָּלַי の訳である。

(11:4, 77:4, 132:3~5)

I.6. ひとみ, יְשׁוֹן, apple of the eye, Augapfel (1回)

RSV (Revised Standard Version, 1946-1952) の訳は眼の瞳孔をさす慣用法で, 非常に大切なものであることを示している。יְשׁוֹן ('išôn) は「小さい人」を意味し, 他人の眼に反映する自分の小さな姿から名づけたものである。これは形容的に, 神がイスラエルをいかに貴重に扱われたか(申命32:10), また敬虔な者に対する神の加護(詩篇17:8), 更に師の教えの貴重さ(箴言7:2) などについて用いられる。昼夜衷願を続けることについて「あなたのひとみを休ませるな」(哀歌2:18) とあるが, ここでは בַּת־עֵינֶיךָ (bat—enek) で字義は「眼の娘」であり, おそらく大切なものを意味するのであろう。

詩篇では敬虔な者に対する神の加護について「ひとみ」のように, と1回使用されているだけである。

(17:8)

I.7. め, עֵינַי, עֵינַי, eye, Auge (77回)

旧約中に859回引用, 新約では ὀφθαλμός が101回引用されている。この語の頻出度が高いことは人間生活において目がいかに重要な役割をもっているかを示し, そこから種々の象徴が生まれている。このほかアラム語 עֵינַי ('ayin) が数回引用され(エズ5:5, ダニ4:34, 7:8, 7:20), また元来は「顔」を意味する עֵינַי (pānim), pl. が「目」と訳され(士師6:11), ἀνάβλεψις が「目の開かれること」(ルカ4:18), ὄμματα, pl. が「目」(マタ20:34), 「両方の目」と訳出(マコ8:23), この場合ヘブル語では עֵינַי ('ēnayim) を当てている。

目は重要な知覚器官であるところから, その無上価値を認め「目のひとみのように守る」という表現が用いられた(申命32:10, 詩篇17:8, 箴言7:2)。他方, 目は誘惑が心に入りこむ通路となり, 欲情の生まれる機会を与える(創世3:6, エゼ6:9, Iヨハ2:16, IIペテ2:14)。人類最初の罪は目を通して起こったのである(創世3:6参照)。

しかしながら「目はからだのあかりであり」(マタ 6:22) 人の全人格を代表する。あわれみを与え、もしくはこれを差し控え(申命 7:16, イザ 13:18), 蔑視し(箴言 30:17), また満足と不満足を表すのである(箴言 27:20)。象徴的には、目は神の全知、全能に関連して用いられている(エゼ 1:18, 10:12, ゼカ 3:9, 4:10, 黙示 5:6)。「悪しき目」(evil eye) という表現は今日の近東地域では迷信的な意味に用いられているが、聖書では「妬み」(マコ 7:22, ὀφθαλμὸς πονηρός, 字義は「悪い目」), また I サム 18:9 の「うがった」は動詞 יָצַח ('in) の訳で「ねたみ」をもって目をつけることを意味する。また「物惜み」[רָא'א] (râ 'a'), 申命 15:9, 「欲の深い人」[יִשׂרָאֵל ('iš ra' 'ayin), 箴言 28:22] は「悪しき目の人」を意味し、反対に「目が澄む」(マタ 6:22) とは寛大を意味したものであろう[箴言 22:9, 「恵む者」] תּוֹב־עַיִן (tob 'ayin), 字義は「善い目」を対照]。

「神の前に出る」と訳されている句の原語の意味は「神の顔を見る」であるが、直接的な表現をさけて「神の前に出る」と訳し、聖所への巡礼または参詣をさして用いた(出エ 34:23-, 申命 16:16, I サム 1:22, イザ 1:12, 詩篇 42:2)。ヨハネは神、またはキリストについて「見る」という語を信仰による視覚または超自然的知識について用いている(ヨハ 6:40, 12:5, 14:19, I ヨハ 3:6, また, III ヨハ 11 節参照)。彼はまたキリストに対して正しい見方をもつことは、神の子として神の唯一の啓示者なる彼を通して神を見ることができると語っている(ヨハ 3:11, 3:32, 6:46, 8:38)。

「目、め」は詩篇の中に 44 回使用されている。「心」の表現として 27 回、ものを「見るための目」は 8 回使われているが、いずれも「見て悟る」意味を含んでいる。「神の目」は 5 回使われているだけで、ほとんどが、人間について使用されている。

また「めのまえ」が 8 回、「まのあたり」が 1 回、「めをとめる」が 6 回、「めくばせ」が 1 回、「めをそそぐ」が 6 回、「めざめる」が 2 回、「めをさます」が 9 回使用されている。

この中で「めをさます」は「心が目覚める」(あることを悟る), および神に対して「心を向けてください(目を開けて私を見てください)」という祈りに用いられている。前者が 3 回、後者が 6 回である。

(め——6:7, 10:8, 11:4, 13:3, 15:4, 17:2, 18:27, 19:8, 25:15, 31:9, 33:18, 34:15, 35:21, 36:2, 38:10, 54:7, 66:7, 69:3, 69:23, 72:14, 73:7, 88:9, 91:8, 92:11, 94:9, 101:5, 115:5, 116:8, 118:23, 119:18, 119:37, 119:82, 119:123, 119:136, 119:148, 121:1, 123:1, 131:1, 132:3~5, 135:16, 139:16, 141:8, 145:15, 146:8)

(めのまえ——5:5, 26:3, 31:22, 36:1, 50:21, 90:4, 101:3, 101:7)

(まのあたり——77:10)

(めをとめる——22:17, 32:8, 56:6, 119:6, 119:15, 130:3)

(めくばせ——35:19)

(めをそそぐ——17:1, 37:37, 63:2, 123:2, 123:2, 123:2)

(めざめる——17:15, 139:18)

(めをさます——3:5, 7:6, 35:23, 44:23, 59:4, 59:5, 73:20a, 73:20b, 78:65)

I.8. みみ, ׀ִשׁ, ear, Ohr (37回)

聖書の中に聴覚器官としての耳の引用は多いが、形容的に引用される場合も多い。神が祈願者に「耳を傾け」られることは祈願者に好意的な態度を示されることを意味する（Ⅱ代 6:40, 7:15, ネヘ 1:6, 詩篇 17:6, 31:2他）。また「聞く」は服従と同義であった。祭司の聖別式には、彼が神の言葉を常に聞く用意のあることを象徴して、その耳に犠牲獣の血が塗られた（レビ 8:23—）。神の言葉を受け入れず、実行しないことは「心にも耳にも割礼のない人」（行伝 7:51）、この出典であるエレ 6:10は「彼らの耳は閉ざされて」、その原文は「割礼のない耳」である。奴隷の耳をきりで柱に刺し通すことは、彼が終身奴隷として主人の家族に属することを示す儀式であった（出エ 21:6）。

「神の言葉を聞く」という表現は旧約、新約を通じて見られる特徴であり、これは啓示の宗教の一面を示している。神は地上においては見ることで見られないものであり、出エ 33:20, イザ 6:5, ヨハ 1:18)、「見る」ことは彼岸生活の時まで保留されている（Ⅰコリ 13:12, Ⅰヨハ 3:2）。預言者たちが「聞け」ということを強調したのはこのためである。キリストは人びとがこれに聞くべき唯一のお方である（マタ 17:5, 並行記事）。宣教において「聞く」ということが中心になっているのはそのためである。（ロマ 10:14, Ⅰテサ 2:13）。

「耳、みみ」は, ear, hear, listen の意味で、詩篇の中に 10 回使用されている。Luther はすべて Ohr を用いている。「神の耳」に 3 回、「心」が 2 回、「聞く」の意味で 5 回使われている。

「耳を傾ける」は、詩篇の中に 27 回使用されている。神が祈願者に「耳を傾け」られることは祈願者に好意的な態度を示されることを意味している。それ故、詩篇ではこの種の祈りが多く、27 回のうち、21 回用いられている。

(みみ—18:6, 34:15, 40:6, 44:1, 58:4~5, 88:2, 92:11, 94:9, 115:5, 135:17)

(耳を傾ける—5:1, 10:17, 17:1, 17:6, 31:2, 39:12, 40:1, 45:10, 49:1, 49:2, 49:4, 54:2, 55:1, 61:1, 71:2, 78:1, 80:1, 84:8, 86:1, 86:6, 88:2, 102:2, 116:2, 130:2, 140:6, 141:1, 143:1)

I.9. くち, ׀פּ, mouth, Mund (71回)

「口」と訳されたヘブル語は 7 種にも及んでいるが、最も多く使用されているのは ׀פּ (pen) で、485 回使用され、訳も種々になっている。新約では στόμα の訳で、これは 76 回使用されている。これが字義どおりの「口」をさすのはもちろんであるが、また「言葉」、「隅」、「端」、「すそ」、また穴のあいたもの、すなわち井戸の口（創世 29:2）、袋の口（創世 42:27）、洞穴の口（ヨシ 10:18）、陰府の口（詩篇 141:7）などについても用いられる。

聖書が言語の器官である口を「言語」の意味に用いていることは、抽象概念を具体的なものを用いて表現するヘブル人の特徴を示す好例として興味がある。沈黙は口に手を当てること（ヨブ 40:4）、大胆に語る自由は「口を開く」（エペ 6:19）と表現された。そのように使信を授かることは「言葉を口に入れる」（エレ 1:9）と言われた。へりくだるこ

とは「口をちりにつける」と表現された(哀歌 3:29)。口はまた人格化されており、独立した行為者と見なされている。「わがさんびの供え者」(詩篇 119:108)の「わが」は「口の」である。神は口の前に門守を置かれる(詩篇 141:3)。口は食物を選択し(箴言 15:14)、口(言葉)はむちを用いて(箴言 14:3)、剣を持つ(黙示 19:15)。この人格化は天使が主の声であるというユダヤ人の観念に寄与するところがあり、また「そして言は肉体となり」(ヨハ 1:14)のために道を備えたのであった。

詩篇には4種のヘブル語 פֶּה (pen), דָּמָם (dāmam), סָפָה (sāphāh), נֶשֶׂא (nāšaq) が「口」と訳されており、合計67回使用されている。

字義どおりの「口」の他に「言葉」が51回と最も多く、「歌い笑う口」、「呼吸する口」、また穴のあいたもの、すなわち井戸の口、陰府の口なども用いられている。

Luther は、ほとんど Mund を用いているが字義どおりの「口」には Mäuler (いやしい意味を含んでいる)を用いている。これは、「言葉」のない飲み食いするだけの器官として表していると思われる。

この他に「くちさき」が1回、「くちづけ」が2回、「悪口」が1回使用されている。このうち「くちづけ」の1回は、2つのものが1つになることを意味し、他は、おののきの表現として「足に口づける」という意味で用いられている。

聖書の中の「くちづけ」は、主として נֶשֶׂא の訳で、旧約に限られ、新約では φίλημα, καταφιλέω, φιλέω で「接吻」の訳を当てている。口づけは両親、子どもたち(創世 27:26, ルツ 1:9, I王 19:20)、または家族、近親の間(創世 29:13, 45:15)、同輩の間(IIサム 20:9, 行伝 20:37)などで行なわれる愛情の表現であった。敬意を表するため賓客にこれをするこもあった(ルカ 7:45)。口づけは唇にもなされたが、一般には頬または頸になされた。口づけは愛(雅歌 1:2, 8:1)、心服(ヨブ 31:27, 詩篇 2:12)のために、また偶像礼拝にもこれがなされた(I王 19:18, ホセ 13:2)。若年者、下級者は年長者、上級者の手に、妻は夫の手またあごひげに、衰願する者は相手の手、衣服、時には足にさえ接吻した(ルカ 7:45)。イスカリオテのユダは同輩者に向かってする接吻の仕方ですて裏切る合図とした(マタ 26:49)。初代教会では信者間の接吻は兄弟愛の表現であった(Iコリ 16:20, Iペテ 5:14)。教会内でも最初は男女とも接吻を交わしたが、のちには異性間の接吻は禁止された。

(くち——5:9, 8:2, 10:7, 16:4, 17:3, 17:10, 18:8, 19:14, 22:13, 22:21, 30:12, 33:6, 34:1, 35:21, 36:3, 37:30, 38:13, 38:14, 39:1, 39:9, 40:3, 40:3, 49:3, 50:16, 50:19, 51:15, 54:2, 55:21, 58:6, 59:7, 59:12, 62:4, 63:5~6, 63:11, 66:14, 69:15, 71:8, 71:15, 73:9, 78:1, 78:2, 78:30, 78:36, 81:10, 89:1, 105:5~6, 106:23, 107:42, 109:2, 109:2, 109:30, 115:5, 119:13, 119:43, 119:72, 119:88, 119:103, 119:131, 126:2, 135:16, 135:17, 138:4, 141:3, 141:7, 144:8, 144:11, 145:21)

(くちさき——10:5)

(くちづけ——2:12, 85:10)

(わるくち——140:11)

I.10. は, שֵׁן, tooth, Zahn (7回)

ヘブル語 שֵׁן (šēn) は「とぐ, 鋭くする」(whet, sharpen, 申命 32:41 参照) という動詞 שִׁשָּׁן (šānan) から派生した名詞で, とがった形状から名づけられた語である。アラム語も同形 (ダニ 7:5, 7:7, 7:19)。ギリシャ語は ὀδούς (マタ 5:38, マコ 9:18, 黙示 9:8) である。

人に歯について (創世 49:12, 民数 11:33, アモ 4:6 他), 獣の歯について (申命 32:24, ヨブ 41:14, ヨエ 1:6 他), また獣の歯について「きば」(ヨブ 4:10) とも訳されている。

歯は種々の形容に引用されているが (ヨブ 16:9, 29:17, 詩篇 3:7, 58:6, 124:6 他), 「歯には歯を」という同害報復法 (lex talionis) の引用は有名である (出エ 21:24, レビ 24:20, 申命 19:21), 無制限報復に制限を加えたこの規定は荒野の正義として文化の, ある発展段階では有効な規制力とされたが, これは許す精神によって超克されるべきものであった (マタ 5:38)。更に, 「父がすっぱいぶどうを食べたので, 子どもの歯がうく」 (エレ 31:29, エゼ 18:2) という因襲的な因果応報の諺 (哀歌 5:7 比較) は前7, 6世紀の批判精神によって強く挑戦され, 道德の個人的責任の性格が明瞭になった。

詩篇の中には6回使用されているが, すべて teeth, および Zahne を用いている。怒りやくやしきの表現として「歯ざしり」の意味で1回使われている以外には, すべて「力, 武器」の意味を含んでいる。すなわち「悪しき者の歯を折る」といった使い方である。

この他に「はがみ」として1回使用されている。これは歯ざしりのことで, 前述と同様の表現方法である。

(は——3:7, 35:16, 57:4, 58:6, 112:10, 124:6)

(はがみ——37:12)

I.11. した, שִׁטָּן, tongue, Zunge (34回)

言語を発する器官, 食物を食べ, 味を味わう器官としての具体的な舌, また形容的な種々の関連で引用されている。特に詩篇と箴言に頻出しており, 詩篇では34回使用されている。N.E.B. はそのほとんどが tongue であるが, talk, lip も用いている。Luther は Zunge 以外には lecken (なめる) と sagen (口に出す) をそれぞれ1回用いているだけである。「食べる」意味は1回だけで, 他の33回は, 言語を発する器官として用いられる。

(した——5:9, 10:7, 12:3, 12:4, 15:3, 22:15, 31:20, 34:13, 35:28, 37:30, 39:1, 39:3, 45:1, 50:19, 51:14, 52:2, 52:4, 55:9, 57:4, 64:3, 64:8, 66:17, 68:23, 71:24, 73:9, 78:36, 109:2, 119:172, 120:2, 120:3, 126:2, 137:6, 139:4, 140:3)

I.12. くちびる, שֵׁפֶת, lip, Lippe (26回)

שֵׁפֶת は「端」(edge), 「くちびる」(lip) と訳される語であるが, 多くは שֵׁפֶתִים (sepātim) du, の形で表現され, 発声の器官としての「くちびる」(lips) を意味し, そこから多様な意味に引用されている (出エ 6:12, レビ 5:4 他)。特に詩篇と箴言に頻出度が高い。

詩篇の中に 26 回使用されている。それらすべて、「話す」あるいは「言葉」といった言語の道具として用いられている。N.E.B. では lip, word, say, speak など多くの語が用いられており、一方 Luther でも Lippe の他に Mund, Maul, Worte などが用いられている。

(くちびる—12:2, 12:3, 12:4, 17:1, 17:4, 21:2, 22:7, 31:18, 34:13, 40:9, 45:2, 51:15, 59:7, 59:12, 63:3, 63:6, 66:14, 71:23, 89:34, 106:33, 119:13, 119:171, 120:2, 140:3, 140:9, 141:3)

I.13. ひげ, זָקַן beard, Bart (1 回)

アッカド語の ziqnu と関連し、「あご」(chin) を意味するが (レビ 13:29, 13:30 参照), あご, 口, 頬に生えるひげをさし「ひげ」(beard) と訳出される。これは獅子のひげをさしても用いられる (Iサム 17:35)。

イスラエルびとは「ひげ」を蓄えることを成人の榮譽のしるしとした。敵によってひげを剃られ (IIサム 10:4-1, イザ 7:20), また抜かれることは (イザ 7:20), 侮蔑のしるしであった。自分でひげを落とすことは、頭髮の場合と同じく、深い悲しみか、自己謙虚のしるしであった (イザ 15:2, エレ 41:5, 48:37 これは悲しみの時に頭をおおうことを記しているエゼ 24:17 と対照する)。時にはひげに香油をつけることもあった (詩篇 133:2)。またある時代にはひげはアッシリア風にカールしたこともあった。ひげの両端を切ったり剃り落とすことは禁止された (レビ 19:27, 21:5)。それは異教的な喪の習慣に関連していたからである。らい患者は衣服でひげをおおうように要求された (レビ 13:45)。友情のしるしとしてひげを持って接吻する習慣もあった (IIサム 20:9)。

詩篇には 133:2 に 1 回使われているだけである。「兄弟たちがともに住むことはいかによく、また美しいことか」、をあたかも頭に注がれた貴い油が「ひげ」に流れ、着物のえりにたれさがると歌っている。

(133:2)

I.14. あご, זָקַן , חִמְצִימָה jaw, Gaumen (3 回)

ヘブル語 זָקַן は「ひげ」と同語であり、詩篇では 2 回使用されている。

さらに חִמְצִימָה で 1 回使用されている。

(22:15, 119:103, 137:6)

II. 頸 部

II.1. のど, לְהַיָּתֵר throat, Kehle, Pachem (咽頭), Hals (頸部) (4 回)

詩篇には 4 回使用されている。N.E.B. は throat が 3 回, lip が 1 回である。これに対し, Luther は, Rachen, Hals, Kehle, Mund とすべて異なる語を用いている。

5:9 で、そののどは開いた墓、の「開いた墓」は、腐敗した臭気をはなつ意味ととれば悪人の真実のない口 (言葉) を警えているものである。69:3 は「のどのかわき」、他の 2 回は声を出す器官としている。

(5:9, 69:3, 115:7, 149:6)

II.2. くび, צַוּן, neck, Kehle (2回)

詩篇の中に2回使用されている。N.E.B. は共に neck であるが Luther は Kehle と Leib を用いている。

「大水が……わたしの首にまで達し」

「彼の首は鉄の首輪がはめられ」

いずれも人間の最も弱いところ、人体の急所として「首」をとらえていることが明らかである。

(19:1, 105:18)

III. 肩 部

かた, סֶקֶם, shoulder, Schulter (1回)

旧約聖書では2種のヘブル語が「肩」と訳されている。קָטֵף kātef) (民数 7:9, 申命 33:12 他) はまた side の意味で「一方」, 「かたわら」, 「わき」などと訳され, I王 7:30 他では洗盤の「ささえ」と訳されている。סֶקֶם (šekem) (創世 7:23, 出エ 12:34 他) も一般に「肩」と訳されているが, 「部分」(portion) の意味で, 創世 48:22 では「分」と訳出されている。レビ人の町シケム(創世 12:6 他) も同形である。新約は ὤμος が使われている。

一般に肩には物をのせて運んだ(出エ 12:34, エゼ 12:6, ルカ 15:5)。肩にのせることは義務づけること(マタ 23:4), また権威を託すことを意味した(イザ 9:6, 22:22)。大祭司は十二部族の名を刻んだ12の宝石をはめた2筋の肩ひもを着けることにより, イスラエルの責任を双肩に担って神の前に執りなすことを表した(出エ 28:12)。

詩篇では「肩」から重荷をのぞくとして1回使用されているだけである。

(8:6)

IV. 手 部

IV.1. うで, זְרוֹן, arm, Arm (12回)

字義どうりの腕についても用いられるが(士師 5:14, 16:12, IIサム 1:10, 雅歌 8:6, エゼ 13:20 他), 力の形容に引用された場合も多い(IIサム 22:35, ヨブ 26:2, 詩篇 10:15, 18:34, 37:17, エレ 48:35, エゼ 30:21, 30:22, 30:24, ダニ 11:6, ホセ 7:15)。特にヤハウエの救い, またさばきの手段として「腕」が引用されている(出エ 6:6, 申命 4:34, 5:15, 9:29, 26:8, 詩篇 89:10, 89:13, 98:1, イザ 48:14, 51:5, 53:1)。「下には永遠の腕がある」(申命 33:27)との表現は, 神の保護に対する絶対的な信頼の支えとなることを意味する。

詩篇では12回, そのうち「神の力」について7回使用されている。N.E.B. は power が1回, 他は arm である。Luther は Macht が1回, 他は Arm である。ただし power は 10:1, Macht は 77:15 である。

(10 : 15, 18 : 34, 37 : 17, 38 : 17, 44 : 3, 44 : 3, 77 : 15, 89 : 10, 89 : 13, 89 : 21, 98 : 1, 136 : 12)

IV.2. ת, יד, קַפ, יָד, hand, Hand(131回)

(yād) は、最も一般的に「手」と訳されるが、「勢い」(イザ 47 : 14), 「記念碑」(I 氏 18 : 3), 「軍勢」(民数 20 : 20), 「指令」(エズ 3 : 10), 「力」(レビ 27 : 8, 申命 32 : 36 他), 「道しるべ」(エゼ 21 : 19) とも訳出されている。

קַפ (kap) は、「手」と訳されるほかに「足の裏のふくらみ」(レビ 11 : 27), 「枝」(レビ 23 : 40 a), 「香を盛る皿」(エレ 52 : 18, 52 : 19), 「杯」(民数 7 : 14 他), 「取手」(雅歌 5 : 5) とも訳出されている。

יָד (yad) は、アラム語で、「手」のほかに「力」(ダニ 6 : 27), 「人手」(ダニ 2 : 34, 2 : 45) と訳出されている。

χείρ は、主として「手」(マタ 3 : 12, 8 : 3, マコ 1 : 31, ルカ 9 : 62, 行伝 8 : 19, I テモ 2 : 8) と訳出される。

聖書は手の動作をもって種々の表象としている。日月を見て手を口につけることは異教徒がそれを礼拝する意味をもっていた(ヨブ 31 : 26, 31 : 27)。手をあげることは民への祝福(レビ 9 : 22), 神に対する祈り(詩篇 28 : 2, 63 : 4, I テモ 2 : 8, シュメール語の šu-il は「祈禱」であるが、それは「あげた手」を意味する), 王に対する敵対(II サム 20 : 21), 盟約(申命 32 : 40) などの意味があった。また手を打つことは約束を守ることのしるし(箴言 6 : 1), 手を与えることは契約を固めるしるしであった(哀歌 5 : 6, エゼ 17 : 18)。手を洗うことは潔白の表明であり(申命 21 : 6, マタ 27 : 24 他), 他人の手に水を注ぐことは彼のしもべであることを示した(II 王 3 : 11)。手に記号をつけることは、その仕える神に属することを示した(イザ 44 : 5 とガラ 6 : 17, 黙示 20 : 4 比較)。犠牲獣の頭に手を置いてこれに罪を負わせた(レビ 1 : 4, イザ 53 : 6)。任職または祝福のしるしに頭に手を置いた(民数 8 : 10, 27 : 18, 行伝 6 : 6, 19 : 6, I テモ 4 : 14, マコ 10 : 16)。

「神の手」は神を擬人化して、その力、行為、恩恵、懲罰などについて引用される。すなわち力(II 代 20 : 6, 行伝 7 : 50, ヘブ 1 : 10), 不思議(出エ 3 : 20), 摂理(詩篇 31 : 15), 備え(エグ 7 : 6, 詩篇 145 : 16), 守り(詩篇 139 : 10, イザ 51 : 16, ヨハ 10 : 28-), 予示(イザ 11 : 11), 刑罰(詩篇 75 : 8, イザ 40 : 2, 50 : 11, ヘブ 10 : 31), 訴求(イザ 65 : 2, ロマ 10 : 21) などがその例である。詩篇の中に「手」は 98 回も使用されておりその頻出度は非常に高い。この中で擬人化して用いられている「神の手」は 32 回使われている。また「人の手」も神同様、その力、行為、所属などについて使用されているが、その他に、「手を上げる」のように感情の表現に、「手を開ける」のように訴えの表現にも使われている。

「手」の中で、明らかに「みぎて」を引用している箇所は、29 回ある。そのうち 21 回が、「神の手」でありその力を表現している。

N.E.B. は hand が 68 回, power が 5 回, 対して Luther は Hand が 74 回, Rechte が 17 回引用されている。

「御手, みて」のヘブル語は「手」と同じである。「御手」はすべて「神の御手」であり,

32 31 回使用のうち、回がその力、行為を意味しており、95 : 7 だけが恩恵の意味をもって用いられている。

この中で「右手」は 2ヶ所、Luther はいずれも *Rechten* を用いている。その他は、44 : 2 の *Ohren* を除いてすべて *Hand* を用いている。N.E.B. は具体的な神の行為を表現していることが多く、*hand* は 18 回使用されているにすぎない。すなわち、*handiwork*, *work*, *do*, *power*, *reach down*, *creation*, *commit my spirit*, *blow*, *care* などの表現が用いられている。

「両手、りょうて」は、88 : 9 に 1 回使用されている。神への呼びかけの表現に用いている。

(て——7 : 3, 9 : 16, 17 : 7, 18 : 20, 18 : 24, 18 : 34, 18 : 35, 20 : 6, 21 : 8, 21 : 8, 22 : 16, 24 : 4, 26 : 6, 26 : 10, 26 : 10, 28 : 2, 28 : 4, 31 : 8, 31 : 15, 36 : 11, 37 : 24, 37 : 33, 38 : 2, 44 : 3, 44 : 20, 45 : 4, 47 : 1, 48 : 10, 55 : 20, 58 : 2, 60 : 5, 63 : 4, 63 : 8, 68 : 31, 71 : 4, 73 : 13, 73 : 23, 74 : 2, 74 : 6, 74 : 11, 74 : 11, 75 : 8, 76 : 5, 77 : 2, 77 : 10, 77 : 20, 78 : 54, 78 : 61, 78 : 72, 80 : 15, 80 : 17, 80 : 17, 81 : 6, 81 : 14, 82 : 4, 89 : 13, 89 : 13, 89 : 21, 89 : 25, 89 : 25, 89 : 42, 89 : 44, 90 : 17, 90 : 17, 91 : 12, 97 : 10, 98 : 1, 98 : 8, 104 : 28, 106 : 10, 106 : 41, 115 : 4, 115 : 7, 118 : 15, 118 : 16, 118 : 16, 121 : 5, 123 : 2, 123 : 2, 125 : 3, 127 : 4, 128 : 2, 129 : 7, 134 : 2, 136 : 12, 137 : 5, 138 : 7, 140 : 4, 141 : 2, 143 : 6, 144 : 1, 144 : 7, 144 : 8, 144 : 8, 144 : 11, 144 : 11, 144 : 11, 149 : 6)

(みて——8 : 6, 10 : 12, 10 : 14, 17 : 14, 18 : 16, 19 : 1, 28 : 5, 31 : 5, 31 : 15, 32 : 4, 39 : 10, 44 : 2, 88 : 5, 92 : 4, 95 : 4, 95 : 5, 95 : 7, 102 : 25, 106 : 26, 108 : 6, 109 : 27, 111 : 7, 119 : 73, 119 : 173, 138 : 7, 138 : 8, 139 : 5, 139 : 10, 139 : 10, 143 : 5, 144 : 7, 145 : 16)

(りょうて——88.9)

IV.3. ゆび, *יָדָא*, *finger*, *Finger* (2 回)

詩篇には 2 回使用されており、1 回は神の力、行為を表し、他は人間の指、戦う指を表現している。N.E.B. はいずれも *finger* を引用しているが、Luther は、前者が *Finger*、後者は *Faust* (握りこぶし) を用いている。

(8 : 3, 144 : 1)

V. 胸 部

V.1. むね, *דָּד*, *heart*, *Herz* (5 回)

דָּד (*dad*) は、「乳ぶさ」と訳され (箴言 5 : 19, RSV は *affection*)、「愛」と同義に用いられている。エルサレムを娼婦にたとえた描写では「胸」(*breasts*) と訳出されている (エゼ 23 : 21, ただし 23 : 8 では露骨に「乳ぶさ」*bosom*)。

חֹב (*hob*) は、「胸」(*bosom*) と訳出されている (ヨブ 31 : 33)。

חֶזֶה (*hāzeh*) は、動物の胸 (*breast*) をさし、主として供犠について祭司の得分となる部分について引用されている (出エ 29 : 26, 29 : 27, レビ 7 : 30-34, 8 : 29 他, 民数 6 : 20, 18 : 18)

רִיב (hêq) は、「ふところ」と訳される語であるが(創世 16:5, 出エ 4:6 他), 身体の一部をさすものとしては「胸」(bosom) と訳され種々の形容に引用されている(ヨブ 23:12, 詩篇 35:13, 箴言 5:20, 伝道 7:9).

לֵב (lēb) の, 字義は「心」(mind, heart) であるが, 形容的に「胸」(heart) と訳出されている(出エ 26:29, 28:30, 詩篇 37:15, 38:10, 45:5, ホセ 13:8)

שָׂדַי (šādayim), du は、「乳ぶさ」(創世 49:25, ヨブ 3:12 他) を意味するが, 「胸」(breasts) と訳出されている(エゼ 23:3).

στῆθος は、「胸」(breast) と訳されている. 食卓では横臥するので, 上席の人の胸あたりに次席の者の頭が来た(ヨハ 13:23, 13:25, 21:20). 胸を打つのは悲しみを表す所作であった(ルカ 18:13, 23:48).

κόλπος は、「胸」(breast) と訳されている(ヨハ 13:23). 食事の時に隣にいる位置で, 「み胸に近く席について」とはイエスに最も近くいたことを意味する. この語は「ふところ」(bosom) とも訳され, 「アブラハムのふところ」(ルカ 16:23) は未来のメシア的饗宴においてアブラハムの近くに座を占める榮譽を意味し, 「ただ父のふところいるひとり子なる神」(ヨハ 1:18) とは神と共なるイエスの神性の表現とされた.

詩篇の中に「胸」は 5 回使用されている. ヘブル語は, רִיב (ふところ), לֵב (心) であり, ここでは形容的に「胸」と訳出されている. 自分自身, 心などの意味で用いられている.

(22:14, 35:13, 37:15, 38:10, 45:5)

V.2. ふところ, רִיב, heart, Herz (6 回)

詩篇の中に 6 回使用されているが, 本来ふところと訳される רִיב は, 2 回用いられているのみである. רִיב, לֵב, שָׂדַי が, 使用され, N.E.B. は, within thy bosom, heads, heart, armful, breast, clinging to, Luther はそれぞれ, Gewand, Haupt, Herzen, Arm Leib, bei seiner Mutter が用いられており, 「胸」同様, 形容的な使用が目立つ.

(22:9, 74:11, 79:12, 89:50~51, 129:7, 131:2)

V.3. しんぞう, לֵב, heart, Herz (1 回)

「心臓, しんぞう」は, 詩篇の中に 1 回使用されているが, 意味は「心」をさしている. 「胸」, 「ふところ」, 「心臓」はほぼ同様な使い方がされており, 合計 12 回使用されている. いずれも「心」の意味を含んでいる. その人自身をさすこともあり, また生命の力が働く場所であり, 病が起こる場所であると考えていた. 性格と行動力としての魂の全体としてとらえていることが明らかである.

(22:14)

VI. 腹 部

VI.1. はら, מִצֵּב, gorged, Bauch (1 回)

「腹を満たす」と訳され, 詩篇の中には 1 回だけ使用されている.

(17:14)

V.2. ないぞう, אִי־זֶוֹ, inward parts, Nieren (1 回)

「内臓, ないぞう」は詩篇の中に 1 回だけ使用されており, Luther は Nieren (腎臓) を用いて, 具体的な使い方をしている。

(139 : 13)

V.3. たい, יִטְּבֵּ, womb, Mutterleid (6 回)

יִטְּבֵּ (beten) は, 「腹」(belly) とも訳されるが (士師 3 : 21, 3 : 22, 箴言 13 : 25, ヨナ 2 : 2), 「胎」(womb) と訳された場合には「子宮」をさしている (「胎内」, 創世 25 : 23, 25 : 24, 38 : 27, 詩篇 139 : 13 他). 胎内における神の造化の妙から, 人間の平等性の教訓 (ヨブ 31 : 15), 神の選びの自覚が引き出されている (イザ 44 : 2, エレ 1 : 5).

רֶחֶם (rehem) は, アッカド語の rēmu (やわらかい) に関連し, 「あわれむ」と同根である. 七十人訳はこの訳に μήτρα を当て, 「子宮」を意味する. 口語聖書は 1 回だけ「腹」と訳し (ヨブ 31 : 15), 他は「胎」(womb) と訳出されている (創世 20 : 18, 29 : 31, 30 : 22, 49 : 25, 民数 12 : 12, I サム 1 : 5 他). 「ういご」は「初めて胎を開いたもの」と表現されている (出エ 13 : 2, 13 : 12, 13 : 15).

κοιλία は, 「腹」(belly) と訳されるが (マタ 12 : 40, 15 : 17, ルカ 15 : 16 他), 「胎」(womb) と訳される場合も多い (マタ 19 : 12, ルカ 1 : 41, 1 : 42, 1 : 44, 11 : 27, 23 : 29, ヨハ 3 : 4). 「胎内にいる時から」という表現は, 「生まれる前からこのかた」という意味である (ルカ 1 : 15, ガラ 1 : 15).

μήτρα は, μήτηρ (母) から来た語である (womb, ルカ 2 : 23, ロマ 4 : 19).

詩篇の中には, 3 種のヘブル語 יִטְּבֵּ, אִי־זֶוֹ, רֶחֶם が使われ, 「胎, たい」は 6 回使用されている. いずれも「母の胎内」を意味している. 人がこの世に生を受けるのは「母の胎」を出した時から, としている. 139 : 13 で, 「母の胎内」に神が「ヒトを組み立てられた」としている. また 127 : 3 で「胎の実」, すなわち子供は神の嗣業であると歌っている. 子供は, 神からささずかったものであると, はっきり述べられている.

(22 : 10, 58 : 3, 71 : 6, 110 : 3, 127 : 3, 139 : 13)

VII. 背 部

せ, כָּבֵּ, back, Rücken (1 回)

詩篇の中には 1 回使用されているだけである. N.E.B. は back, Luther は Rücken といずれも字義通りであるが, イスラエルの大地をさしており, 形容的な使い方をしている。

(129 : 3)

VIII. 腰 部

こし, אֵתְּ, side, Seite (4 回)

詩篇の中に 4 回使用されている. אֵתְּ, side, Seite が 1 回用いられているが「剣を帯びる腰」として使っている. 他の 3 回は לִּבְּ, אֵתְּנִי の 2 語が用いられているがいずれも身

体的苦痛を訴えている。「腰痛」は、旧約時代から身体 of 重要な問題であったらしい。(38 : 7, 45 : 3, 66 : 11, 69 : 23)

IX. 脚 部

IX.1. ひざ, אַרְקָבָה, knee, Knine (1回)

אַרְקָבָה ('arkūbāh) は、アラム語で「ひざ」(knee) と訳出されている (ダニ 5 : 6)。恐怖のためにひざの震えることに関して引用されている。

רַקַּב (b'arak) は、アラム語で、「ひざ」(knee) を意味し、動詞 רַקַּב (b'arak) と合わせて「ひざをかがめて」と訳され、祈禱の姿勢について引用されている (ダニ 6 : 10)。

בִּרְקַיִם (birkayim), du は、「かがめる」(II代 6 : 13), 「祝福する」(ヨシ 24 : 10) と訳された動詞 בָּרַךְ (bārak) と関連する語で、多くの場合この多数形で表現され、「ひざ」(knee) と訳されている (創世 30 : 3, 48 : 12 他)。

γόνα は、「ひざ」(knee) と訳出されている (ロマ 11 : 4, 14 : 11, エペ 3 : 14, ピリ 2 : 10, ヘブ 12 : 12)。

字義どうりの「ひざ」をさしてもいるが (II王 4 : 20, イザ 66 : 12, エゼ 47 : 4, ヘブ 12 : 12), またいろいろな意味をもって引用されている。父親が新しく生まれた子をひざに受けることは父権の確認を意味し (ヨブ 3 : 12), 祖父がこのようにする場合に養子とすることを意味した (創世 50 : 23, 同じことが創世 48 : 12 にも意味されている)。また妻の侍女によって夫が子を得た場合に、正妻のひざにその子を受けるのは、正妻の子として認めることを意味した (創世 30 : 3)。

人は恐怖によってひざがよろめき (イザ 35 : 3, ナホ 2 : 10), また力がなくなって震える (ヨブ 4 : 4, 詩篇 109 : 24, ヘブ 12 : 122)。「ひざをかがめる」また「ひざまづく」という表現は水を飲む場合のような実際の姿勢についても用いられるが (士師 7 : 5-), 多くは敬意を表す姿勢, 特に懇願する場合 (神に対しては祈り) の姿勢について引用されており (I王 8 : 54, 19 : 18, II王 1 : 13, II代 6 : 13, エズ 9 : 5, イザ 45 : 23, ダニ 10 : 10, マコ 15 : 19, ルカ 22 : 41, 行伝 7 : 60, 9 : 40, 20 : 36, 21 : 5), この場合両ひざを折ってかがむだけでなく、頭を地につけ時にはひざの間に顔を隠すこともあった (I王 18 : 42)。この姿勢は礼拝 (προσκύνησις, worship) における姿勢であり, その意味に引用されている場合が多い (マタ 8 : 2, 17 : 14, 26 : 39, 27 : 29, マコ 1 : 40, 10 : 17, 14 : 35, ルカ 5 : 12, 22 : 41, ロマ 11 : 4, エペ 3 : 14, ピリ 2 : 10)。しかし一般にはユダヤ人も初期のキリスト教徒も祈禱は、特に公の祈禱には立って行う習慣を守っていた。

詩篇の中には「ひざ」は1回使用されているだけである。断食して祈っている詩人のひざが、伸びないほどに弱った様子を表現している。ひざまずいて祈っている間に立つことができなくなったのであろう。

(109 : 24)

IX.2. ひざまづく, אֲבִרְקָה, kneel, Knien (2回)

אֲבִרְקָה, ('abrēk) は、おそらくエジプト語 *ib-r.k* (the heart to thee) の音写で、「気

をつけ!)(Attention!)の意味とされ、「ひざまずけ!)(Bow the knee!)と訳されている(創世 41:43)。

τίθημι τὰ γόνατα は、「ひざまずく」(kneel down)と訳され、ローマの兵士たちがキリストを嘲弄した時の揶揄的処作について1回引用される(マコ 15:19)ほかは、祈禱の場合に関連して引用されている(ルカ 22:41, 行伝 7:60, 9:40, 20:36, 21:5)。

詩篇には2回使用されているが、いずれも祈りの様子を表現している。しかし、使用頻度があまりにも少ないのは、一般に祈りは立って行う習慣があったからである。

ヘブル語は קָרָע, קָרָע־לַעַל + קָרָע の2種が使用されている。

(95:6, 22:29)

IX.3. くびす, כּוּבֵץ, tritt mich mit Füßen (1回)

詩篇の中に1回使用されているだけである。親しい友の裏切りを表現しており「くびすをあげる」として使われている。同じ釜の飯を食べた一番親しい友人が、自分の前から去って行ったのである。

(41:9)

IX.4. あし, לָפֶט, foot, Fuß (37回)

聖書では「足」はしばしば象徴的に使用され、被征服者の首に足をかける習慣から(ヨシ 10:24, IIサム 22:29)、「足の下に置く」という表現は征服を意味した(詩篇 8:6, 47:3, ロマ 16:20, Iコリ 15:25)。したがって「足もとに伏す」とは挨拶、懇願、敬礼の姿勢、また謙遜とを示すものであった(申命 33:3, II王 4:27, エス 8:3, マコ 5:22, 黙示 1:17)。これはまた師の足もとに学ぶ弟子の謙遜な態度でもあった(ルカ 10:39, 「足もと」, 行伝 22:3, 「ひざもと」)。客の足に接吻することは最大の尊敬のしるしであった(ルカ 7:38)。遠来の客の足を洗うことは下僕の役目であった。したがって主イエスが弟子たちの足を洗ったもうたのは、最も著しい謙遜の実物教訓であった(ヨハ 13:5)。

詩篇の中に「足、あし」は37回使用されているが、「足」、「脚」、「踝」を、「あし」と訳されている。しかし字義どおり足として使われることは少なく、しばしば象徴的に使用されている。「歩み」の意味で15回、「立つ」様の表現に8回用いられている。征服の意味で7回、懇願、謙遜の意味では、2回使用されてるだけである。

18:36は、神の力によって「足首」がしっかり支えられ、ぐらつかずにしっかり歩くことができる様を歌っている。

(2:12, 8:6, 9:15, 17:5, 18:9, 18:33, 18:33, 18:36, 22:16, 25:15, 26:12, 31:8, 36:11, 38:16, 40:2, 47:3, 56:13, 57:6, 58:10, 66:9, 68:23, 8:30, 73:2, 74:3, 91:12, 91:13, 94:18, 105:18, 115:7, 116:8, 119:59, 119:101, 119:105, 121:3, 122:2, 140:4, 147:10)

IX.5. あしかせ, לְבַשְׁתִּי, fetters, Fesseln (1回)

刑具として引用されるが、その一つ לְבַשְׁתִּי (n^huštayim)は「青銅」の意味で、双数形になっている(士師 16:21, IIサム 3:34, II王 25:7)。同語は、「鎖」とも訳され(エレ 39:7, 52:11)、青銅製の輪2個を鎖でつなぎ、両足をはめるようになっていたものである(マコ 5:4, ルカ 8:29, πένδη はこれに当たる)。いま一つ ζύλον は字義が示す

ように木製で、厚い板に足を入れるだけのくぼみを2カ所に作り、囚人の足を入れさせ、他の1枚を合わせて錠をかけた刑具である（行伝 16：24, stocks, ヨブ 13：27 の סַד (sad) はこれに相当する）。詩篇では1回使用されているだけである。

(106：18)

IX.6. あしだい, סִדְיָן , footstool, Fuß (3 回)

玉座は高かったので、儀式的着座にはそれに登る足台を必要とした。ソロモンの玉座には金の足台が設けてあった（II代 9：18）。聖書には足台は多く比喩的に神の足台としての大地（イザ 66：1, マタ 5：35, 行伝 7：49）、神殿（I代 28：2, 詩篇 99：5, 132：7, 哀歌 2：1）、メシア的王の勝利（詩篇 110：1, ルカ 20：43, 行伝 2：35, ヘブ 1：13, 10：13）などをさしている。

詩篇には3回使用されている。

(99：5, 110：1, 132：7)

IX.7. あしだらい, קִיָּר , wash bowl, Waschbecken (2 回)

「足だらいを投げる」とは敵に対する侮蔑を示した（詩篇 60：8=108：9）。詩篇にはこの2回使用されている。足だらいは洗足用のやや大形の鉢で、出土物によれば長さ 60 cm, 幅 40 cm の楕円形、底の中央には足をのせる台、片隅には排水孔が設けられている。

ここでは、2回とも足だらいとしてモアブをさしており、イスラエルの民の地に対する神の主権を確認し、これを与えることを約束している。

(60：8, 108：9)

IX.8. あしあと, פְּדָמַי , footstep, Spur (3 回)

詩篇の中に3回使用されており、その意味は「足跡」が2回、「歩み」が1回である。神の「足跡」について1回使われている。

(77：19, 85：13, 89：50~51)

IX.9. あしがかり, פְּדָמָה , foothold, Grund (1 回)

Grund は（川）底の意味であり、「立つ瀬」のない深い泥の中に入った様を表している。

(69：2)

IX.10. あしもと, לְפָנַי , foot, Fuß (1 回)

「足元に伏す」は、あいさつ、懇願、敬礼の姿勢、謙遜な態度を意味することは、IX.4. あし、で述べたとおりである。詩篇では1回行なわれているだけであり、ここでは「足元」に倒れた様を歌っている。

(18：38)

X. からだ

X.1. 「体」のの語義

その他の「からだ」に関する用語は、表2にとどめておいて、最後に旧約時代の「体」について述べることにする。

さて旧約聖書には、ギリシャや近世の「体」にあたる語がない。そこから「体」という考

えもヘブライになかったことになるのであろうか。70人訳旧約聖書 (SEPTUA GINTA) のギリシャ語の σῶμα 「体」と訳されたヘブライ語をひろってみるとじつにいろいろで、しかも、不思議なことにはいずれも「体」を意味していない。

それらは, אָדָם (創世 47:12), שָׂרֵף (創世 36:6) など「ひと」であり, あるいは死体の語義 הַנֶּפֶשׁ (歴代 I 10:12), נֶפֶשׁ (申命 21:23), בָּשָׂר (創世 15:11) であり, あるいは皮 עוֹר (ヨブ 19:26), 背 כִּבְשָׁן (I 列王 14:9), יָד (ヨブ 20:25), 胸 הַחֹמֶת (I サム 31:10), 死体など身体の部分をし, あるいはまたひとの肉なる面を示す בָּשָׂר (箴言 5:11) のこともある。なおロビンソンは הַנֶּפֶשׁ は, ほぼ体に近いけれども, 極めて特殊な語で, 体にしては頻度も少ないからここでは無視してよいと言っている。

なお בָּשָׂר は肉だからただちに体を意味してよさそうに思われるが, 70人訳でそれが σῶμα と訳されたのは 21 回だけで, あとの 143 回は肉 σὰρξ となっていて, σῶμα は בָּשָׂר の派生的語義であることがわかる。その派生のしかたにしても, ギリシャでは肉は体の資料 hyle とし, 体のかわりになりえたけれども, ヘブライには資料製作 (ποιέσις) の考えはとぼしかったにちがいないから בָּשָׂר がどんな意味あいの体であったか, したがってはたして体であったかも問題であろう。

X.2. 人間創造

いったい, ひとの肉である面, בָּשָׂר 性とは何なのだろうか。旧約聖書において肉とともにひとを性格づけている霊 (רוּחַ) やいのち, 魂 (נֶפֶשׁ) と並べて考えてみよう。

たとえば, ヤハウエ記の「人間創造」の話ではどうなっているか。

「その日ヤハウエ神は地の塵から人を造り, 彼の鼻に生命の息を吹きこまれた。そこで人は生きた者となった。」(創世記 2:7, 関根正雄訳, 創世記 岩波文庫)

バルト (K. Barth 1848~1900) は, ここを「はじめに塵からひとの体 (Körper) がつく

表 2. 詩篇の中のか「らだに」に関する用語 (その他)

脂肪	חָלָב	Thick and gross	—	1回
髓	חָלָב	—	Herzen	1回
肉	בָּשָׂר	flesh	Fleisch	15回
身	בָּשָׂר	body	Leib	16回
からだ	בָּשָׂר	body	Leib	3回
骨	עֲצָם	bone	Bein	16回
血	דָּם	blood	Blut	19回
きば	מַלְתְּעוֹת	jaw	Gebiß	1回
角	קֶרֶן	horn	Horn	13回

られ、それが霊のたらしかけによって身体 (Leib), 人体 (身体, 肉体) になるが, Leib になったときは、すでに魂 (Ψχή, Seele), 精神, 心, 生命をおびている。ひとは体化した魂 (leibhafte Seele) であり、同様にまた魂化した体 (beseelter Leib) であるのだ。魂と体をギリシャ風に分けて「ひとは魂だ」とするプラント的な命題は、それにただちに補って、「ひとつの、それも自分の体の魂だ」と言わないなら無意味になる」と解釈している。

バルトは、ドイツ語の Körper, Leib の使い分けにたよってギリシャの魂体二元をたくみにかわしたけれども、そこにギリシャ流の製作の考えを持ち込んだために、結局 Körper, Leib の二元論におちいつている。

創世記の「人間創造」においては、ヤハウェはひとの体をつくったのではなく、魂も体もそなえたひとをつくったのである、と解するほかはない。

XI. む す び

詩篇の中に「人のからだ」に関する用語が 40 種類、650 回引用されていることが明らかとなった。その中で「手」が 131 回、「目」が 77 回、「口」が 71 回で高頻度を示す。これらから、聖詩人たちが純真単刀直な態度で神の前に立ち、両手を高くさしのべ、目を上に向け、そして喉が張り裂けんばかりの大声で聖名を讃美し、また赤裸々なハートで幼児のごとく歎き、不平、不満を神にぶつけるその姿をありありと推測することが可能となった。すなわち、かれらにとって神の讃美は自分の体による表現そのものであったと言える。

しかしイエスはマルコ 9: 42-47 において、われわれの常識ではとても考えられない発言をしている。

しかしわたしを信ずるこの小さな者を一人でも罪にいざなう者は、大きな^{ひまうす} 挽臼^{くび}を頸^{けい}にかけて海に投げ込まれた方が、はるかにその人の^{しあ} 仕合わせである。⁴³⁾もし手があなたを罪にいざなうなら、切ってすてよ。両手^{かたて}があつて地獄^{ゲヘナ}の消えぬ火の中へ行くよりも、片手で永遠の命^{はい}に入る方が仕合わせである。^{[44)無し].}⁴⁵⁾もし足があなたを罪にいざなうなら、切ってすてよ。両足^{かたあし}があつて地獄に投げ込まれるよりも、片足で永遠の命に入る方が仕合わせである。^{[46)無し].}⁴⁷⁾もしまた目^めがあなたを罪にいざなうら、えぐり出せ。両目^めがあつて地獄に投げ込まれるよりも、片目^めで神の国に入る方が仕合わせである。(塚本虎二訳)

手も目も口も、首も、足も、神を讃美するための供ものか、あるいは^{サタン} 悪魔の小道具か。人間の別れ道はこの辺にあるようである。

なお、ヘブライ語、ギリシャ語の字母は平沢所有のものを使用した。

参考文献

- 1) 1) BIBLIA HEBRAICA : Edited by RUDOLF KITTEL (1937).
- 2) 旧約聖書 : 日本聖書協会 (1956).
- 3) The New English Bible (1970).
- 4) 聖書語句大辞典 : 教文館 (1959).
- 5) 新聖書大辞典 : キリスト新聞社 (1971).
- 6) 植木良佐 : 詩篇講義 (I), 旧約知識, 17—19 (1936).
- 7) 関根正雄 : 詩篇注解(上), (下), 教文館 (1970).
- 8) The Book of PSALMS, Vol. I, II : Critical and Exegetical Commentary, CHARLES Augustus, Briggs (1960).
- 9) 平沢彌一郎 : 聖書の中の人と体(1)-(3), 東京工大人文論叢 3-5 (1977-1979).
- 10) 塚本虎二訳 : 福音書, 岩波文庫 (1970).
- 11) 関根正雄訳 : 詩篇, 岩波文庫 (1974).
- 12) J. Robinson : The Body, p. 11, n. 2 (1952).
- 13) K. Barth : Kirchliche Dogmatik, III2, s, 421 (1948).
- 14) 関根正雄訳 : 創世記, 2 : 7, 岩波文庫 (1971).
- 15) 真方敬道 : 古代思想にあらわれたひとと体, 聖書とその周辺, 伊藤節書房, 251-271 (1959).
- 16) 平沢彌一郎 : 福音書異同一覧, 山本書店 (1981).
- 17) 平沢彌一郎 : 聖書を読む, 論創社 (1987).

(昭和62年12月23日受理)